

# 闇夜の梅

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂

青空文庫



エ、講談の方の読物は、多く記録、其の他古書等、多少<sup>よりどころ</sup>のあ  
るものでござりますが、浄瑠璃や落語人情噺に至っては、<sup>さくぶつ</sup>作物  
が多いようござります。段々種を探つて見ると詰らぬもので、  
彼<sup>か</sup>の浄瑠璃で名高いお染久松のごときも、実説では久松が十五、  
お染が三歳<sup>みつ</sup>であつたというから、何<sup>ど</sup>うしても浮氣の出来よう道理  
がござりませぬ。久松が十五の時、主人の娘お染を桂川<sup>ほとり</sup>の辺で遊  
ばせて居る中<sup>うち</sup>に、ついで<sup>あやま</sup>過つてお染を川の中へ落したから御主人へ  
申訳がない、何<sup>ど</sup>うかして助けにやならぬと思つたものか、久松も

続いて飛込むと、游泳およぎを知らなかつたからついそれ切りとなつた。これを種にしてお染久松という質しちみせ店の浄瑠璃が出来ましたものでござります。又大阪の今宮という処ところに心中があつた時に、或狂ある言作者たぐみが巧たくみにこれを綴つづり、標題なんを何としたら宜よかろうかと色々いろいろに考えたが、何うしても工夫が附きませぬ、そこで三好みよし松洛しょうらくの許もとへ行つて、

「なんとこれ迄こしらに拵こしらえたが、外題げだいを何とつけたらよかろう」

「いやお前のように、そんなに凝こつちやアいけませぬ、寧いっそ手軽く『心中話しんじゆうわたつた今宮』と仕たらようござりましょう」

「成程」

と直すくに右とおりの通とおりの外題げだいにして演やると大層おほいに當あつたという話わがある。

その真似をして林家正藏はやしやしやうぞうという怪談師が、今戸いまどに心中のあつた時に『たつた今戸心中噺』と標題を置き拵えた怪談はなしが大たいして評が好よかつたという事でござります。この闇夜の梅と題するお話は、戯作物などとは事違い、全く私わたくしが聞きました事実談でござります。

え、浅草に三筋町みすじまちと申す所がある。是も縁で、三筋町があるから、其の側に三味線堀というのがあるなどは誠におかしい、それゆえ生駒いこまというお邸やしきがあるんだなんぞは、後あとから拵えたものらしい。下谷したやがあるから上野があつて、側に仲町なかつちやうがありまして上中下じやうちゆうげと揃そろつて居おる。縁というものは何う考えても不思議なもので、腕うで尽づくにも金かね尽づくにも及ばぬものだというが、これは左様かも知れませぬ、まア呉服屋などで、不図ふと地機じばたの好よい、お値

段も恰好かつこうな反物たんものを見附けたから買おうと思つて懐中ふところへ手を入れて見ると、金子かねが少々足りないから、一旦立ち帰り、金子きんすの用意をして再び来ると、誠にお気の毒様でござりますが、貴方あなたがお帰りになると、直に入らしたお方が見せて呉れと仰おつしやいまして、到頭とうとう其の方の方へ縁附えんづきになりました。いやそれは残念な事をした、もうあゝいうのはありませぬか。へい、あれは二百反の中うち二反べつぱただけ別機べつぱたであつたのですから、もう外ほかにはござりませぬ。それでは仕方がない、縁がなかつたのだらう。と諦めてしまふと、時経たつてから不意と田舎などから、自分が買いたいと思つた品とそっくりな反物を貰う事などがある。又お馴染なじみの芸者でも、生憎あいにく買おうと思つた晩外にお約束でもあれば逢う事は出来

ませぬ。又金子かねを沢山ふとこ懐中に入れて芝居を觀ようと思つて行つても、爪も立たないほどの大入おおいりで、這入り所はいどころがなければ觀る事は出来ませぬ。だから縁の無い事は金尽にも力尽にもいかぬもので、ましてや夫婦の縁などと来ては尚なおさら更重い事で、人間の了簡りょうかんで自由に出来るものではござりませぬ。

え、浅草の三筋町——俗に棧町さんまちという所に、御維新前ごいつしんまで甲州屋と申す紙店かみやがござりました。主人あるじは先年みまかりまして、お杉という後家あとが家督を踏まえて居おる。お嬢さんは今年十七になつて、名をお梅と云つて、近所では評判の別嬪べっぴんでござります。番頭、手代、小僧、下女、下男等あまた数多召使めいしい、何暗からず立派に暮して居りました。すると子飼こがいから居おる桑之助くめのすけというもの、今

では立派な手代となり、誠に優しい性うまれつき質しつで、其の上びなん美男びなんでござります。嬢さんも最早としごろ妙齡めいれいゆえ、良いいい聲むねがあつたらば取りたいもの、お母つかさんは大事だいじがつて少しも側わきを離さないようにして置きましたが、どうも仕方がないもので、ある晩のことお母さんが不図目を覚まして見ると娘が居ない。

「はてな、何処どこへ行つたか知らん、手水ちようずに行つたならもう帰りりそんなものだが」

と思つたが何時いつまで経つても戻つて来ない。

母「はてな嬢ももう年頃、外に何も苦勞になる事はないが、店の手代の桑之助は子飼からの馴染ゆえ大層仲が好いいようだが、事によつたら深いひいき鼻ひいき尻しりにでもしていはせぬか知ら」



とお母さんが始めて気が付いたけれども、気の付きようが遅か  
 ったから、もう間に合いません。これが馬鹿のお母さんなら直に  
 起き上つて紙燭でも点し、からく方々を開け散かして、「此  
 の娘は何うしたんだよ」なんて呶鳴つて騒ぐんだが、沈着いた方  
 だから其様な蓮葉な真似はしない、いきなり長羅宇の煙管で灰  
 吹をポン／＼と叩いた。深夜のことゆえピーンと響いたから、  
 お嬢さんは恟りいたし、そつと拔足をして便所へ参り、ギーイ、  
 バタンと便所から出たような音ばかりさせて、ポチャ／＼／＼と  
 水をかけて手を洗い、何喰わぬ顔をして其の晩は寝てしまった。  
 翌朝になると、お母さんが直に鳶頭を呼びにやつて、右の話を  
 いたし、一時桑之助の暇を取つて貰いたいと云う。鳶頭も承知を

して立帰った後で、

主婦「桑や、桑」

桑「へい」

主婦「あのお前のう、ちよいと鳥越とりこえの鳶頭とりのこの処まで行つてくんな、用は行きさえすれば解る………私がそういつたから来ましたといえれば解るんだよ」

桑「へいかしこま畏りました」

何だか理由わけは解らぬが、桑之助は直に抱かゝの鳶頭とりのこの処へやつて来まして、

桑「へいこんち今日は」

鳶「いや、お上あがんなさい、宜いいからまアお上あがんなさい、ずうつ

と二階へ、梯子はしごが危あやのうがすよ、おいお民たみ、桑まどんんに上あげるんだから好いい茶ちやを入いれなよ、なに、何か茶ちやうけがあるだろう、羊羹ようかんがあつた筈はずだ、あれを切きんなよ、チヨツ不精ふせいな奴やつだな、折おりの蓋ふたの上うで切きれるもんか、俎まないた板いたを持もつて来きなくつちやアいかねえ、厚あく切きんなよ、薄うすつぺらに切きると旨いくねえから、己おれが持もつて来きいてつたら直ただに持もつて来きな、宜いいか、話わの真ま最さい中ちゆうはんまな時とき分に持もつて来きちやアいけねえぜ」

トンくくくと梯子はしごを上あつて、

鳶とび「へ、今日こんにちは」

桑ま「何なんだかね鳶とび頭あたま、お内儀かみさんが、鳶とび頭あたまの処ところへ行いきさえすれば解わかるから、行いつて来きいと仰おしやいましたから参まりました」

鳶「それは何うもお忙がしい処をお呼び立て申して済みません  
 ね、桑どん実は斯うこいう話だ、今朝ねお内儀さんから私へお人だ、  
 何だろうと思つて直すぐに出掛けてつてお目にかゝると、奥の六畳へ  
 通して長々と昔噺が始まつたんだ、鳶頭お前がまだ年の行ゆかねえ  
 時分から当うち家へ入でいりをするねと仰しやるから、左様でござえます、  
 長なげえ間色々お世話になりますんで、なに其そん様な事は何うでも宜いい  
 が、旦那が死んで今年で四年になるし、私も段々年を取るし、お  
 梅ももう十七になる、来年は歳廻りが良いいから何どん様な者でも聳さかを  
 取つたらよかろうと話をすると、いつでも娘いが厭いやがる、他人ひと様か  
 ら、斯うよいう良よい聳さかがありますと申込んで厭いやがるもんだから、  
 他人ひとが色々な事を云つて困る、妙としご齡ろの娘が聳さかを取るのを厭いやがる

には、何か理由わけがあるんだろう、なにそれは店の手代に糸之助と  
いう好いい男があるから事に依よつたらあの好いい男と仔細わけでもありは  
しないか、と云いもしまいが、ひよつとして其様なことを云われ  
た日には、世間の口にやア戸が閉たてられねえ、ねえ鳶頭、と斯う  
お内儀さんがいうのだ、してみると何かお前さんとお嬢さまとあ  
やしい情交なかにでもなっているように私わしの耳には聞えるんだ、宜よう  
がすかい、それから、誠に何うもそれは御心配なことだというと、  
お内儀さんの仰しやるには、糸之助も小さい時分から長く勤めて  
居たから、能よく気心も知れて居るが、何分今直すぐに何どう斯こうという  
訳にも往ゆかず、捨すて置いて失策しくじりでも出来るといけねえから、一  
と先まず谷中やなかの兄あにさんの方へ連れて行って、時節を待ったら宜よかる

う、其の中うちにはまた出入をさせる事もあるじやアねえか、と斯う仰しやるのだ、うむ、それから、なんだ斯ういう事も云った、何分宅うちの奉公人や何かの口がうるせえから、一時いちじそういう事にするんだが、仮令たとえ他人ひとが何なんといおうと、私の為にはたつた一人の娘だから、同じ取るなら娘の氣に入つた聲を取つて、初ういまご孫の顔を見たいと云うのが親の情じょうあい 合あじやアねえか、娘が強たつて彼あれでなければならぬといえ、私には氣に入らんでも、娘の好いた聲を取つて其の若夫婦に私は死し水みづを取つて貰もらう氣だが、鳶頭何うだろう、と仰しやるのだ、お内儀さんの思おぼしめし 召めいでは、一時お前まえさんに暇を出して、世間でぐずぐずいわねえようにしちまつて、それから良い里を拵もえて、ずうつと表向きお前まえさんを聲こゑにして、死

水を取つて貰おうてえお心持があるんだから、糸どん早まつちやアいけねえよ、宜うがすか、お内儀さんには、色々深え思召があるんだから、私も大旦那のお若え時分、まだ糸鬢奴の時分から、甲州屋のお店へ出入りをしてえて、お前さんとも古い馴染だが、今度来やアがった番頭ね、彼奴が悪い奴なんだ、いろく胡麻を摺りやアがって仕様がねえからお内儀さんも心配をしていらつしやるんだが、ねえ糸どん」

糸「へエ、承知いたしました」

鳶「でね、何にもいわず、少し兄の方に用事が出来ましたからお暇を願います、長々御厄介になりました、と斯ういつて廉をいわずにお暇を取ちまう方が好い、いろくくどくしく詫な

んぞを仕ちやア可いけねえよ」

糸「へエ、かしこま畏りました、何うも誠に面目次第もござりませぬ」

とおろく泣きながら、糸之助が帰りまして、

糸「へエ、只今」

内儀「あい糸か、此方こつちへお這入り、好いよ遠慮をしなくても：

…さつき先刻、鳶頭が来たから四方山よもやまの話をして置いたが、何うだい

能よくお前の胸に落ち入ったかい、何も是これという越度おちどの無いお前

に暇を出すといったら、如何いかにも酷ひどい主人のようにお思いかも知

らないが、これはお前の為だよ、お前も小さい時分にいたから、

何だか私も子のような心持がして誠まことに可愛かわゆく思うが、何分世間の

口が面倒だから暇を出すのだけでも、又縁しゅうじがあれば一旦主



従<sup>ゆづ</sup>となつたのだもの、出入の出来ないことは無いから、まあ、  
 \ 気を長く、兄<sup>あに</sup>さんの処におとなしくしているが好い、軽はずみ  
 な心を出して、こんな淋しいお寺なんぞにいられるものかつて、  
 ふいと何<sup>どこ</sup>処かへ姿を隠すような事でもあられると、どんなに案じ  
 られるか知れないから、よく心を落着けて時節を待つて、呉れ  
 なくちやア私が困るよ」

桑「へエ、有難うございます、誠に何うも面目次第もございま  
 せぬ」

内儀「さ、早く行くが好い、何時までも此<sup>こゝ</sup>処にいと面倒だか  
 ら、谷中のお寺へ行つたら能く兄さんのいう事を聴いて、身体を  
 大事にして時節の来るのを待つていなよ」

糸「へエ有難う存じます」

と袂たもとから手拭てぬぐいを取出し、涙を拭いながら店へ出て来ると、番頭は糸之助いいとまが暇いとまになつて好い気味だと喜んで居る。

糸「えゝ、番頭さん、私は唯今いいとまお暇いとまになりまして谷中の兄の方へ参りますから、何分お店の事をよろしく願います」

番頭「左様じゃげな、根ねから些ちつとも知らんかつたが、何う云う理由わけで糸之助がお暇いとまになりますかと云うて、私わしも色々言葉を尽してお詫をしたが、なか／＼お聴き容いれがない、お前方が知つた事ことぢやない、此様こゝないに云われるで何うにも仕ようがないじやて、併しかし何うも気の毒な事ことぢやな、根ねから、全体商人あきんどはお前の性分に合あわぬのじやから、却かえつて谷中のお寺へ行きなはつた方が心が沈おちつ着つい

て宜いやろう」

桑「へエ有難う、何うも長々お世話さまでございました、お店の方も段々忙しくなりますから、人が殖えなければならぬ処を少なくするんですから、何分宜しくお頼み申します、あの定吉どんは何処かへ行きましたか」

番頭「いや今其処に居ったツけ、定吉イ定吉」

定「おや桑どん、今お前さんを探しに表へ出ましたが、貴方はお暇になりましたてえから、何ういう理由だらうと聞いても解らないんですが、本当に何うもお気の毒さまで」

桑「お前と私とは別段仲が好かつたから、お前に別れるのは誠に辛いけれども、扱ない事があつてお暇になつたのだが、私が居

なくなると番頭さんに無理な小言をいわれても、誰も詫びてくれるものがないから、お前も能く気を付けて叱られないように御奉公を大事にするんだよ」

定「へエ有難う、お前さんが下るくらいいなら私も下った方がよ  
うございます、幾ら私がいる気でも、外の者は、みんな意地が悪  
くつて居られませぬもの、其そ中でも、新次郎しんじろうなどは、し  
んねりむつつりの嫌な人で、私が寝てえると焼芋の皮なんぞを態わざ  
と置いて、そうしてお内儀さんが朝のれん暖簾とこの処から顔を出して、さ、  
皆みんな起きなよと仰しやる時に新どんの意地悪が、あの昨晩定吉が寝  
ながら焼芋を食べましたなんて嘘ばかり吐ついて人を叱ちらせるんで  
すもの、そうすると番頭さんが私の尻まくを捲まくつて、定規板でピシャ

く撲なぐるんですもの、痛くて堪たまりやアしませんや、此こ間ないだも宿やど下お  
 りの時お母つかさんにそういつたんです、お内儀さんもお嬢さんも糸  
 どんも皆みんな善いい方なだけれども、ほかの者は残らず意地が悪くつて辛  
 抱あが出来ないてえと、そんな事をいうものじゃアない、それが身  
 の修しゅうぎよう行ぎやうだから、我慢をしなくつちやアいけないと云われます  
 から、糸どんがおいでなさる間は辛抱あが出来る、糸どんは大層私  
 を可愛あがつておくんなすつて、何かおいしい物があると、お蔵の  
 棚たなへ内ないしやう証しやうで取つといておくんなすつて、ちよいと出し物があ  
 るから蔵まで一緒に行つておくれつて連れてつて、さ、お食くべつ  
 てカステラ巻だの何なんだのを食くべさせて下すつたり、お小遣こづかいをおく  
 んなすつたりして、本当に優やさしくして下さるよと然そういつたら、

おふくろ  
母親が涙ぐんで、あゝ有難いことだ、そういうお方が在らつしやるのはお前が奉公の出来る瑞相だから、何でもその方をしくじらないように為しなくつちやア可いけない、その方の御機嫌を損ねるとお店にはいられないから、どんな無理なことを仰しやつてもいう事を聴くんだよといいました」

あつち  
桑「早く彼方へお出で、何時までも此処こゝにいと又叱られるから」

定「へエ、今行きます」

せいすけ  
桑「清助せいすけどんは何うしたえ」

まき  
定「今物置まきに薪を積直して居ましたつけ」

いとまごい  
桑「ちよいと清助どんにも暇いとまごい乞いをして行こう」

定「じゃア私も一緒に行きましょう」

糸「清助どん、何うも長々お世話になりました」

清「お、糸どんか、今ね己おれが聞いたんだ、おさきどんがの話に、今日急に糸どんがお暇いとまになったてえから、己ハアほんとうに魂消たまげただ、何でもこれは番頭野郎の策略ちげに違えねえ、彼奴あいつは厭に意地が悪くつて、何かお前めえさま様を追出させるように巧たくんだに違え無ねえだ、本当にあのくれえ憎らしい野郎も無えもんだ、ちよいと何一つくれるんでもお前めえさんと番頭とではこう違うだ、こんな物は己おらア嫌きれえだ、お前めえも嫌えかも知れねえが喰うなら喰つてくんろ、勿体ねえからつてお前めえさんは旨うめえ物をくれるだが、番頭野郎は自分がそれ程に好かねえもんでも惜しがつてくれやアがるだ、此間こねえだも

他<sup>よそ</sup>処<sup>よ</sup>から法事の饅頭が来た時、お店へも出ると彼奴は酒呑だから  
 甘<sup>あめ</sup>え物は嫌えだろう、それだのにさ、清助<sup>われ</sup>汝<sup>われ</sup>がに饅頭をくれてや  
 る、田舎者だから此<sup>こん</sup>様な結構な物は食ったことは有るめえ、汝<sup>われ</sup>が  
 のような奴に惜しいもんだけど、汝<sup>われ</sup>がに食わすと、斯<sup>こ</sup>う吐<sup>ぬか</sup>しや  
 がるだ、己<sup>あんま</sup>も余り腹が立ったから、何うかして意<sup>い</sup>趣<sup>しゆげえ</sup>返しをして  
 やろうと思つて、此<sup>こ</sup>間<sup>ねえだひ</sup>鹿<sup>じき</sup>角<sup>あぶらげ</sup>菜<sup>さい</sup>と油<sup>あぶら</sup>揚<sup>あげ</sup>のお菜<sup>さい</sup>の時に、お椀の中へ  
 そつと草<sup>わらしむし</sup>鞋<sup>むし</sup>虫<sup>むし</sup>を入れて食わせてやつただ、そんな事は何うでも  
 好<sup>い</sup>いが、お前<sup>めえ</sup>さん<sup>いとま</sup>がお暇<sup>いとま</sup>になるなら何<sup>な</sup>んにも楽<sup>たのし</sup>みが無<sup>ね</sup>えから己<sup>おら</sup>も  
 下<sup>さが</sup>ろうか知ら、下<sup>すぐ</sup>らば直<sup>く</sup>に故<sup>けえ</sup>郷<sup>え</sup>へ帰<sup>おれ</sup>るだよ、己<sup>おれ</sup>は信<sup>い</sup>州<sup>いやま</sup>飯<sup>ぜえ</sup>山<sup>ざえ</sup>の在<sup>ざえ</sup>  
 でござえますから、めつたに来る事もあるめえが、善<sup>こ</sup>光<sup>つ</sup>寺<sup>つ</sup>へ参<sup>こ</sup>詣<sup>つ</sup>  
 にでも来ることが有つたら是非寄つて下せえまし、田<sup>こ</sup>舎<sup>つ</sup>の事<sup>こ</sup>たか



ら、何も外に御馳走の仕ようが無えから、鹿でも打つて御馳走し  
べいから、何だか馴染の人に別れるのは辛えもんだね、何うかま  
ア成るだけ煩らわねえように氣い付けて、好いかね」

糸「有難う」

娘のお梅に逢いたいは山々だが、お内儀さんのお言葉添えもあ  
るから、その儘暇を取つて、これから谷中の長安寺へ参り、いま  
に好い便りがあるだろうと待つて居りました。此方はお梅、あれ  
きり何の便りもないが、もしや糸之助の了簡が変りはしないかと、  
娘心にいろ／＼と思ひ計り、耐え兼ねたものか、ある夜二歩金で  
五十両ほどを窃み出して懐中いたし、お高祖頭巾を被り、庭下駄  
を履いたなりで家を抜け出し、上野の三三橋の側まで来ると、夜

明<sup>あか</sup>しの茶飯屋が出ていたから、お梅はそれへ来て、

梅 「御免なさいまし」

爺 「へエおいでなさいまし、此方<sup>こちら</sup>へお掛けなさいまして」

梅 「はい、あの谷中の方へは何う参<sup>まゐ</sup>つたら宜<sup>よろ</sup>しゅうござい  
まし  
よう」

爺 「え、谷中は何方<sup>どちら</sup>までお出でなさるんですい」

梅 「あの長安寺と申す寺でございませぬがね」

爺 「え、\*仰願<sup>こうがんじ</sup>寺をくれろと仰しやるんですか、えへ、仰願  
寺なら蠟燭<sup>ろうそくや</sup>屋へお出<sup>いで</sup>なさらないじゃアございませぬよ」

\* 「小さき一種のろうそく江戸山谷の仰願寺にて用いはじめしよ  
り云う」

梅「いえあのお寺でございませがね」

爺「何なんですけらいお螻けらの虫ですと」

梅「いゝえ長安寺というお寺へ参るのでございませが」

すると小暗い所にいた一人の男が口を出して、

男「えゝ、もしくお嬢さん、その長安寺というのは私わっちが能く

知つてますよ」

と云いながらずっと出た男の姿なりを見ると、紋羽もんばの綿頭巾かむを被り、  
 裾すそ短みじな筒袖つゝそでを着し、白木の二重廻りの三さん尺じやくを締め、  
 盲めくら縞しまの股引腹掛と云う風体ふうてい。

男「まあ御免なさい、私わっちアこんな形姿なりをしてえませが、その長

安寺の門番でげす」

梅「おやく、それじゃア貴方あなたにお聞きをしたら分りませうが、あの糸之助はやつぱり和尚様のお側に居りますか」

男「えゝ、糸之助さんは、おいででござえます、あなたは何ぞなん御用でもあるんでげすか」

梅「はい、あの、糸之助は私わたくしどもに長らく勤めて居つたものですが、少し理由わけがありました、先せん達だ暇まを出しましたが、それきり何の沙汰もございませんで、余あんまり案じられますから出て参りましたのでございます」

男「へエー左様でございますか、じゃアまア私わつしと一緒においでなさい、どうせ彼方あっちへ帰るんですからお連れ申しましょう、其の代りお嬢様に少しお願ねげえがあるんでげす、毎度私は和尚様から殺

生をしてはならねえぞとやかましく云われるんでげすが、すき嗜な道は止められず、每晚こ斯うやって、\*どんどんへ来ては鰻あなづりの穴釣をやつてるんでげすが、どうぞお嬢さま私が此処こゝで釣をした事は和尚様に黙つてゝおくんなさい」

\*「三橋の側にあつた不忍池の水の落口」

梅「御不都合の事なら決して申しは致しませぬ」

男「おい老じい爺いさん」

爺「へい」

男「あのね、此のお嬢様は己の方へ来るお方だから、己が御案内をして行くゆんだ、さ、喰つた代でえを此処こゝへ置くぜ」

爺「あなた、これは一分銀で、お釣はござりませぬが」

男「なに釣は要らねえ、お前めえにやつちまわア」

爺「それは何うも有難う存じます、左様なら夜よが更けて居りますから、お気を付けあそばして」

男「なに大丈夫だ、己が附でえじようぶいてるから」

と怪しの男がお梅を連れて、不しのばず忍べんてん弁てん天てんの池ほどりの辺までかゝつて参りました。

## 二

え、引ひきつゞき続づきのお梅桑之助のお話。何ういう理わけ由ゆか女子おんなの名を

先に云つて男子おとこの名を後あとで呼ぶ。お花半七とか、お染久松とか、

夕霧伊左衛門とかいうような訳で、実に可笑しいものでござり  
 ます。さて日本も嘉永かえいの五年あたりは、まだ世の中が開ひらけませぬか  
 ら、神信心かみしんじんに凝こるとか、易うらない占うらないに見て貰もらうとかいうような人が  
 多おほかつたものでござります。丁度嘉永の六年に亜米利加あめりか船ふねが日本  
 へ渡来をいたしてから、諸藩共に鎖国攘夷などという事を称え出  
 し、そろ／＼ごたつきはじめましたが、町家ちやうかでは些ちつとも気が附  
 かず居ゐつたことことでござります。

彼かの浅草三筋町の甲州屋の娘お梅が、糸之助いとすけの後あとを慕あこつて家出  
 をいたす。何程年なんねんが行かぬとは申しながら、実に無分別極ごくまった  
 訳でござります。左様な事とは毫すこしも知らぬ糸之助が、丁度お梅  
 が家出をした其の翌朝よくあさのこと、兄の玄道げんどうが谷中の青雲寺まで

法要があつて出かけた留守、竹箒を持って頻りに庭を掃いていると、表からずつと這入つて来た男は年頃三十二三ぐらいで、色の浅黒い鼻筋の通つたちよつと青髯あおひげの生えた、口許くちもとの締つた、利口なりそうな顔附をして居ますけれども、形姿なりを見ると極不粹ごくぶすいな拵こしらえで、艾草もぐさ縞しまの単衣ひとえに紺いっほんの一本独どつこ鉗かんの帯を締め、にこ〜笑いながら、

男「え、御免なさいまし」

糸「はい、お出でなさい」

男「え、長安寺ちあんじというのは此方こちらですか」

糸「へエ、左様でございます」

男「あの此方に糸之助さんというお方がおいででございますか」



糸「へエ、糸之助は私わたくしでございしますが……」

男「ア左様でげすか、是は何うも……左様ならちよいと表まで顔を貸してお貰い申したいもので」

糸「へエ……あの生憎あいにく兄が居ませぬで、何うも家うちを空からにし  
て出る訳には参りませぬから、若もし何なんぞ御用がおあんなさるなら  
庫裏くりの方へお上あがんなすつて」

男「左様でげすか、じゃア御免なせえまし」

糸「さ、何卒どうぞ此方へ」

男「へい」

紺足袋ほこりの塵埃ほこりを払って上へ昇あがる。糸之助は渋茶と共に有合ありあいの  
乾菓子ひがしか何かをそれへ出す。

男「いえ、もうお構いなせえますな、へい有難う、え、貴方あなたにはお初にお目にかゝりますが、私わっちは千駄木せんだぎの植木屋九兵衛くへえという者でございまして」

糸「へえへえ」

九「実了其の、昨夜ゆうべ、お嬢様さんが突然だしぬけに私わっちん処へおいでなすつたんで」

糸「え、嬢さんと仰しやるのは……………」

九「へえ鳥とりこえさん越ま棧まち町の甲州屋のお嬢さんで」

糸「へえー、何ういう理由わけで貴方あなたの処へお嬢様さんが……………」

九「いや、これは解りますすめえ、斯こういう理由なんでげす、あのお嬢さんが二歳ふたつの時に、私わっちの母おふくろ親がお乳を上げたんで、まア

外ほかに誰も相談相手が無いからって、訪ねておいでなすつたから、  
 母親もびっくりして、まアお嬢さん、今時分何ういう理由わけで入ら  
 したたてえと、犬に吠えられたり何かして、命からがら漸ようようの事  
 でお前の処とこへ来た理由は、誠に乳母ばあや面目ないが、長らく宅うちに勤  
 めて居た手代の糸之助というものと、人知れず懇ねんごろを通じて夫婦約  
 束をした、処つかがお母さんが世間の口がうるさいから一時斯いちじこうはす  
 るものゝ、後のちには必ず添つわせてやると仰しやつて、糸之助に暇いとまを  
 出して了しまつた後あとで、外ほかから聳そを取れと仰しやる、それじゃアどう  
 も糸之助に義理が済まないから、私は斯きうやつて駈か出したんだと  
 仰しやるんです、そうすると私の母親は胆きもをつぶしてね、素すツ堅か  
 気たぎだから、なか／＼合が点ってんしねえ、それはお嬢様飛さんんでもない事

で、お店の奉公人や何かと私いたずら通をするようなお嬢様なら、私の  
 処へは置きませぬ、只たつた今出てお出いでなせえというから、私わっしが仲  
 裁をして、まアお母つかア待ちねえ、そうお前めえのように頑かたくな固なこ  
 ばかりいっちやアしようがねえ、折角頼りに思つておいでなすつ  
 たお前まで、そんな邪険な事を云つたら娘心の一筋に思い詰め、  
 此家こゝから又駈出して途中散途さんとで、何様どんな軽はずみな心を出して、  
 間違まちがえがねえとも限らねえ、まアく己のいう通りにして居ねえ  
 といつて、それからお嬢様を此方こちへ呼んでお母ふくろはあんな事を云い  
 ますが、お前まえさんは何処どこまでも糸之助様と添さんいたたいという了簡が  
 あるなれば、私わっしがまア何うにでもしてお世話を致しましょう、貴  
 方はお宅うちを勘当されても、糸之助様と添さん遂げるといふ程の御決心

がありますかてえと、屹度きつと遂げます、一旦糸之助も私と夫婦約束をしたのですもの、確たしかに私を見捨てないという事もいいましたし、又そんな不実な人ではありませぬ、じやア宜ようがすが、何処どこか行く所がありますかと云うと、何処も目的あてがねえ、こう云うから私わっちも困つて、兎も角糸さんに逢つてからの事に仕ましようといつて、今日けさわぎ／＼お前めえさんの所とこへ訪ねて来たんですが、お前さんも矢つ張お嬢様と何処までも添い遂げるといふ御了簡があるんですか、ないんですか、一応貴方の胸を聴きに來たんでげす」

糸「それは何うも怪けしからぬ事です、あの時お内儀かみさん様が色々と御眞実に仰しやつて下さつたから、私わたくしは斯こうやつて何処へも行ゆかずに辛抱をして居ますのに、お嬢さん様に聳を取れと仰しやるような、

そんな御了簡違いのお方なら、私は何処までもお嬢様を連れて逃げまして、何様な真似をしたつて屹度添い遂げます」

九「それで私も安心をしたが、お前さん何処か知ってる所がありますか」

糸「私は別に懇意な家もありませぬ」

九「そりやア困るね、何所かありませぬか」

糸「へエ、何も」

九「何も無いたつて困るねえ、じやまア斯うしよう、下総の都賀崎と云う所に金藏という者がある、私とは少し親類合の者だから、これへ手紙を附けて上げるから、当人に逢つて、能く相談をして世帯を持たせて貰いなさるが宜い、併し彼方へ行くだ

けの路銀と世帯を持つだけの用意はありやすか」

桑「金と云つては別にございませぬが、兄が此こないおたくし間私にしまつて置けと預けた金がございます、それは本堂再建さいこんのため、世話人衆しゆのお骨折で、八十両程集りましたのでございます」

九「イヤ八十両ありやア結構だ、三十両一ト資本もとでと云うが、何様な事んをしても五十両なければ十分てえ訳には往ゆかねえが、其の上なおに尚三十両も余計な資金ものがあれば、立派にそれで取附けますが、其の金をお前様さん取れますか」

桑「へえ、用筆筒ようだんすの抽斗ひきだしに這入つていますから直すぐに取れます、そうして後のちにお宅へ出ますが何方どちらです」

九「あの千駄木へお出でなさると右側に下駄屋があります、そ

れへ附いて広い横町を右へ曲ると棚村たなむらというお坊主の別荘があ

る、其のうしろへ往つて植木屋の九兵衛といえは直じきに知れます」

糸「じゃア、今晚兄が帰つたら直すぐに出ます」

九「今晚といつてもなるたけ早い方が宜ようがすよ」

糸「へエ日暮までにはどんな事をしても屹度きつと参ります」

九「じゃア其の積つもりで何分お頼み申します」

糸「ハイ宜しゆうございます」

九「左様なら」

パイと表へ出て了しまう。其の跡で糸之助が、無分別ふとにも不図悪心

を起し、己おのれが預りの金子八十両を窃ぬすみ出し、此方こなたへ出て見ると今

の男が証拠かねに置いて行つたものか、予かて見覚えあるお梅の金かね巾ぎん



ちやく  
着そこが其処ほうに抛ほうり出してあつた、取上げて見ると中に金子が三兩ばかり這入はつてゐる。

桑「はてな、是はあの人こが置いて行つたのか知ら、ア、そう／＼、これを置いて行くゆからは此こん中へ八十兩の金子かねを入れて来い」といふ謎めかも知れない」

と右の\*女めおとぎんちやく夫やく巾着ちやくの中へ金子かねを入れ、確しつかり懐ふに仕舞つて、そろ／＼出かけようかと思つてゐる処へ兄の玄道が歸つて参り、それより入替り立代り客が来るので、何分出る事が出来ませぬ。

\*「せなかあわせにくつついてゐる巾着」

お話は二つに分れまして鳥越棧町の甲州屋方では大騒さわぎ、昨夜ゆうべ娘のお梅が家出をいたした切りかいくれ行方が解りませぬから、

家内中の心配大方ならず、お鬮みくじを取るやら、卜筮うらないに占てもらうやら、大變な騒ぎをして居る処へ、不忍弁天の池に、十六七の娘の死体が打込んであるという噂を聞込んで来て、知らせた者があゝあるから、母親おふくろは仰天して取るものも取あえず来て見ると、お梅に相違ないから早々人を以て御検視を願ひ、段々死体を調べて見ると、縊り殺して池の中へ投込んだものらしく、殊ことには持出した五十両の金子きんすが懐にないから、おおかた物取ものどりであろうと、事が極つて検視済の上死骸を引取り、漸く日暮方に死骸を棺桶へ収めることになった。処へ鳶頭かしらが来まして、

鳶「へエ唯今、あの何なんでげす、八丁堀さんと、それから一番遠いのが麻布あざいぶの御親類でげすが、それ／＼皆子分みなを出してお知ら

せ申しました」

番頭「あ、それはどうも大きに御苦労〜」

鳶「何だなア、定さん、男の癖におい〜泣くのは止しねえ、お内儀様は女でこそあれ、あゝいう御気象だから、涙一滴滲こぼさぬで我慢をしていらつしやるのだ、それだのにお前が早桶の側へ行って、おい〜泣くもんだから不可いけえよ」

定「泣くなつてそれは無理でございます、何だか此の早桶の側へ来ると哀しくなるんですもの、お嬢様は別段に可愛さんがつて呉れましたから、私は哀しくなるのです」

鳶「まア泣いちやア不可ねえ、えゝお内儀様唯今」

内儀「あい、鳶頭大きに色々お骨折ほねおりで、何も彼もお前のお蔭

で行届ゆきとぎきました」

鳶「どう致しまして、就つきまして麻布さん様の方へお嬢さん様が家出をなすつた事を知らせにやりました、金太きんたがようやく先方むこうへ着いたくらいの時に、又斯こういう変事が出来ましたから、追おっかけて人を出し、これ〜でおなくなりになったてえ事をお知らせ申しましたら、大層にお驚きなすつたそうでげす」

内儀「そうであつたらう、もう麻布のが一番あれ彼を可愛がつてくれたから、誠に有難う、万事お前のお蔭で行届ゆきとぎきました、が斯うなるのも皆みんなな因縁事と諦めて居ますから、私は哀しくも何ともありませぬよ」

鳶「いえ、何どうも御氣象な事で、まあどうもお嬢さま様がお小さい

時分、確か七歳ななつのお祝の時、私わつしがお供を致しまして、鎮守様から  
浅草の観音様へ参めえりましたが、いまだに能く覚えております、往  
来の者が皆振返みんなつて見て、まあどうも玉子を剥むいたような綺麗ねな  
お嬢様さんだ、可愛らしいお児こだつて誰でも誉めねえものは無なえくれ  
えでげしたが、幼少ちいせい時分からのお馴染ゆえ、此の頃になつて  
お嬢様さんが高慢なことを仰しやいまして、あなた其様そんな事をいつ  
たツていけませぬ、わたしの膝の上で小便をした事がありますぜ  
てえと、あら鳶頭幼少まつかせい時分の事をいっっちゃア厭いやだよなんて、  
真紅まつかにおなりでしたが、何とも申そうようはござえませぬ」  
内儀「はい、お前も久しい馴染ゆえお線香でも上げてやつてお  
くれ」

鳶「へえ、有難う……え、番頭さん、誠に何うも飛んでもねえ事で」

番頭「いや鳶頭大きに御苦労であつた、まア此方こつちへ来なさい、何うもお内儀さんの思おほしめし召めしを考えて見るとお気の毒で何うもならぬ、ならぬが当家のうちお嬢様さんを殺したのは誰じやという事は大概お前も感付いておるじやろうな」

鳶「いゝえ、些ちつとも知りやせぬよ、何だか物取だろつてえ評判はんぱんなんで」

番「いゝや物取ではない、何でも是は糸之助の仕業しわざに相違ないという私わたしの考かんがえだ」

鳶「ハ、飛んでもねえ事をいいますね、其様そのんなお前めえさん……ナ

なんぼ糸どんが憎いたつて、無暗に人殺に落したりなんかして、どうしてお前さん糸どんは其様な悪い事をするような人じゃアねえ」

番「いやそれはいかぬ、お内儀はん斯ういう最中で争論をしては済みまへんが、一寸これに就いておはなしがあるんでおす、一昨夜私が一寸用場へ参りまして用を達してから、手を洗うていと、ほんのりと星光で人影が見えるで、はてナと思うて斯う透して見ておると、垣根の外へ廻つて来たのが糸之助でおす、するとお嬢様がこつちやから声を掛けて糸之助やないかというとはい私でございまして低声でいいましたわい、まア糸之助よう来ておくれた、はい漸うの事で忍んで参りました、お前に逢いとう

て逢いとうてどうもならぬであつた、私も逢いとうてならぬから、漸うの思いで参りました、私もそう長う寺に辛抱しては居られまへぬ、あんたはんも私のような者でも本当に思うて下はるなら、寧ろ手に手を取つて此所を逃げまひよう、そうしてあんたと二人で夫婦になつて、深山の奥なりと行んで暮したいが、それに就いても切て金子の五六十両も持つてお出でやというと、お、左様か、そんなら屹度明日の晩持つて行ぬという事を確かに聞いた」

鳶「へえ、それから」

番「どうも変やと思つていると、あんたお嬢様が莫大のお金を持つて逃げやはつた、それ故何うも私の思うには糸之助がお嬢様を殺して金子を取つて、其の死骸を池中へ投げ込んだに違いな



いと斯う考えるのでおす」

鳶「おう、おう番頭さん、詰らねえ事を云つちやアいけねえぜ、お前は全体ぜんてえ衆めえどんを憎むから然う思そうんだが、まアよく考えて見ねえ、衆どんが人殺をするような人だか何だか、ソ、其様そんな解らねえ事をいつたつて仕様がねえじやアねえか」

番「イヤ真ま実まの事だ、証拠まがあるぜ」

鳶「証し、な何が証拠しだ」

番「定吉い、ちよつと此処こへ来い、えゝめろく泣くな」

定「何です番頭ばんさん、泣くなたつてお嬢様が死んで哀しくつて堪たらないから、泣くんです」

番「えゝい、汝おのれがお嬢様を殺したもおんなじ事こた」

定「あゝ、いう無理な事ばかりいうんだもの、どういう理由で」

番「汝おのれは一日おとといの夜よこの店で帯を締め直す時に落した手紙は、

お嬢様さんに頼まれて桑之助の処へ届けようとしたのじゃないか」

定「あら………仕様がないな、彼所あそこに持っているのだもの、道

理で無いと思つた」

番「此様こんなものをお嬢様から頼まれるのが悪いのだ」

定「頼まれるのが悪いたつて………仕様がないな………その頼

まれたのはなんでございます………仕様がないな………あの………

それはお嬢様さんが、定や、ちよいとお出でてえから、はいてつてお

居間へ行つたんです、然そうするとお前何所どこへ行くんだと仰しやる

から、私わたくしは谷中の方へ参るんですといつたら、そんならお前これ

を糸どんに届けてお呉れって、お手紙を私の懐へ入れたから持つて行つたんです」

番「ウム、持つて行つて何うした」

定「何うしたって……しようがないな」

番「おのれ汝は度々たびく糸之助の処へとこ寄るから悪いのじゃ」

定「ナニ寄る気でもないんですが、近いから、あのお寺の前を通るとまがりかど曲角のお寺だもんですから、よく門の所とこなんぞをは箒いで、ひさしぶり久振だ、お寄りなてえから、へいてんでもと旧はほうばい朋輩だから寄りますね」

番「道理で毎もいっつかい使が長いのや」

定「ナニ別に長い訳もないんですが、今お葬式とむらいが来てお饅頭

を貰つた、それをお前に上げるから、お待ちてえから待つてたんです」

番「えゝい、喰い物の事ばかり云うて居る。汝が取次をするから此の様な間違が出来たのや、サ是を御覧、此の手紙が何よりの証拠や、私はお前に逢いとうて逢いとうてならぬから、家出をしてお前の処へ行く、何卒末長く見捨てずに置いておくれと書いてあるやないか、是が何よりの証拠や」

鳶「証拠だツて、そんな事は私ア知りやアしねえ」

番「知りやせぬと云うてまアよく考えて見なはれ、当家のお内儀様はこないに諦めの宜えお方やから、涙一滴滲さぬが、鳶頭が仲へ這入つて口を利き、もう甲州屋の家へは足踏をさせぬと云い

切つて引取つたのやないか、それじゃのに、又此<sup>こゝ</sup>処へ桑之助が忍んで来て、お嬢様<sup>さん</sup>を誘い出すような事になつたのは、大方鳶頭も内々<sup>ないく</sup>知つて居るのではないか、桑之助と共謀<sup>ぐも</sup>になつてお嬢様を誘い出し、金額<sup>かね</sup>を半分ぐらい取つたのではないかアと思われても是非がないやないか」

云うと怒<sup>おこ</sup>つたの怒らないの、もと正直な人だから、額へ青筋を出して、

鳶「何を吐<sup>ぬか</sup>しやアがるんでえ、撲<sup>なぐ</sup>り付けるぞ、コレ頭を禿<sup>はげ</sup>らかしやアがつて馬鹿も休み休み云え、桑どんが人を殺して金を取る様な人か人でねえか大<sup>て</sup>概<sup>えげ</sup>解りそうなもんだ、手前<sup>てめえ</sup>の心に識別ウするから其<sup>そんな</sup>様事を吐<sup>ぬか</sup>すんだ、己が半分取つたア何だ、撲り付け

るぞ」

番「打たいでも宜え、私は理の当然をいうのや、お嬢様を殺して金子を取ったという訳じゃないが、然う思われても是非がないと云うのや」

鳶「何が是非がないんだ、撲倒すぞ」

清「まあ〜少し待つておくれ」

と云いながら台所より出て来たは清助というお飯炊。

清「鳶頭まあ〜貴方は正直な方だから、こんな事を云われたら、嘸はア胆が焦れて堪るめえが、己が一通りいわねばなんねえ事があるだアから、少し待つたが宜え——コレ番頭さん、此処へ出ろ」

番「何じや、おのれ汝が出る幕じやアない、汝は飯炊だから台所に引ひ込んで、飯の焦ぬように気を付けて居れ、此様な事に口出しをせぬでも宜いわ」

清「成程己は僅なわずかお給金を戴いて飯炊をしてえるからツて、飯せえ焦がさねえようにしていれば宜えというもんじやアあんめえ、当家へ泥坊が這入へいつてお内儀様を斬殺きりころしても、己が飯炊だからつて、何にも構わずに竈の前へつにぶつ坐つわつて、宜えと思わしやるか、われ汝が曲つた心に識別するから然そういう間違つた事をいうだ、コレよく考かんえて見ろよ、汝は糸どんを憎むから、少しの事を廉かどに取つて糸どんが嬢じようさま様を殺したなんてえが、何処どこまでも汝がそんな事を頑張つて殺したといわば、己おらア合がってん点しねえだ、糸どんが

庭へ来てお嬢様と相談して、明日あしたの晩連れて逃げようてえ約束をしたのを見たと言わば、何故早く其の事をお内儀様へ知らせねえだ、桑どんがコソ／＼でお嬢様を誘い出しに来やしたから、油断をしねえが宜ようがすとちよつと知らせればそれで宜ええだ、然うすれば直すぐにお嬢様を他家わきへ預けるとか、左さもなければお内儀様が氣きイ附けて奉公人も皆起きて居おらば、何うしたつて嬢様が逃げ出す氣きづ遣けえはねえだ、逃げなけりやア殺されることもねえだ、それを知つて居ながら黙つて、嬢様が逃出してから殺されば、汝が殺したも同じ事ことだぞ、まだぐず／＼何か云やアがると打ぶつ殺して己おれも死しんじまうだ」

内儀「コレ／＼清助静かにしないか、番頭さん様に向つてそんな事



をいつては濟まないじやないか、鳶頭、お前も嘸腹さぞが立つだろうが、何卒どうぞ我慢をしてくれ、悉皆みんな私が吞込んでゐるから、私は決して桑之助の仕業しわざとは思わなければ、大方桑之助も此の事を知らずに谷中に居るに違ひない、お前が行つて斯こうくと知らせたら、桑之助も定めて恟びつくりするだろうと思ふから、お願いだが、お前ちよいと此の事を桑之助へ知らせてお呉れでないか」

鳶「え、往いきますとも、半分取つたらうなんて、飛んでもねえ濡ぬれぎぬ衣を着せられたんですもの、直すぐに行つて来ます、少し提ちようち灯んをお貸しなすつて」

ずうつと腹立紛はらたちまぎれに飛びだして谷中の長安寺へやつて来ました。

鳶「え、御免なせえ、御免なせえ」

糸「はい……おやくゝ鳶頭」

鳶「や、糸どん……まア宜よかつた、はあ……お前めえに怪しい事があれば何所どっかへ逃げちまうんだが、ちゃんど此処こゝに居てくれたんでまア宜よかつた、あゝ有ありがて難え」

糸「あの兄あにさん、何だか鳥越の鳶頭がおいでなさいましたよ」

玄「いやア、鳶頭、まあ何卒どうぞ此方こちらへ誠まことに何どうも御無沙汰をして濟まぬ、ちよつとお礼れいかた／＼お訪ね申さんければならぬのじ

やが、何分じようにも寺用じように取紛れて存じながら大きに御無沙汰を……」

鳶「そう長つたらしく云つてられちやア困る、大騒動が出来たんだ、まア御挨拶あはれは後あとにしておくんなせえ、おゝ糸どん、お嬢様

が昨夜家出をした事を知ってるかい」

糸「いゝえ………」

鳶「いゝえつて震えたぜ、え、おい、お嬢様が殺されちまつたんだよ」

糸「えつ、お嬢様が……」

鳶「死骸が弁天の池から今朝上がつて、御検視を願うの何のつて大騒ぎをしたんだ」

糸「へえー……じゃア千駄木の植木屋の九兵衛さんというのは何です、全体まア何ういう理由わけなんです」

鳶「何ういう理由の何のつて、大変な騒ぎなんで、まア和尚様さんお聴きになつて下せえまし、お嬢様は糸どんに逢いてえ一心から、

莫ぼく大での金子かねを持もて家出もをしたから、大方泥坊つに躡つけられて途中  
 で遣やるの遣やらねえのといつたもんだから、殺ころされたに違ちがえねえん  
 で、それを店の番頭野郎ながこう吐ぬすんだ、何なんでも糸いとどんがお嬢  
 様さまを誘いい出して、途中で殺ころして金子を取とつたに違ちがえねえ、鳶頭とんずも  
 糸いとどんと共謀ぐるになつて、其の金を二十五両ぐらい取とつたろう、こ  
 う吐はすんだ、私わは腹はらが立たつて堪たまらねえから、余よ程ほど殴なぐりつけてや  
 ろうとは思おもつたけれども、お前まえさん何なにうもね、お内儀かみ様さまが御愁傷ごしゆうきやう  
 の中なかだから、そんな乱暴狼籍らんぼうらうげきの真似まねをしちやア済すまねえと思おもつて、  
 耐こえていたが、糸いとどんが何なんにも知しらずに斯こうやつてゐるから本ほん当とう  
 に宜よろかつた、何卒どうぞ直すに行いつておおくくななせえ」

玄げん「いや、それは重おも々つ御道ご理りな訳わけじや、此方こちらにも不ふ行し跡だらがあ

る事ことちやから然そう云う御疑念ごぎねんが懸かつても仕方がない、仕方がないが、然さう云う場合になると、糸之助は頓とんと口の利けぬ奴じやで、私わしも一緒に参りましょう」

鳶とび「そりやア有ありがて難え、なるたけ大勢の方がようがす、じやア直すぐに行つておくんなせえ」

これから提灯ていとうを点つけて寺を出かけ、三人揃そろつて甲州屋の裏口から這入はいつて来きました。

内儀「さア、何卒どうぞ此方こちらへ、く」

鳶「え、お内儀様かみさん、谷中の長安寺の和尚様も入らつしやいましたよ」

内儀「おやくそれは何うもまア何うぞ此方へ」

玄「はい、御免を……唯今鳶頭から不慮の事を承りまして、何とも御愁傷の段察し入ります」

鳶「まあ、其様な長つたらしい悔は後くやみあとにしておくんなせえ、さ、  
 糸どん此方こつちへ這入んなよ」

糸「へエ……えゝ、お内儀様かみさんお嬢様が飛んだ事にお成りあそば  
 しまして、嘸御愁傷むいせいででござりましょう」

是迄は涙一滴こぼほ濡さぬでいたが、今しも糸之助の顔を見ると、堪こら  
 えかねて袖を顔へ押宛おしあてて、わつとばかりにそれへ泣倒れました。

内儀「糸や、何うも飛んだ事になりましたよ、私はね、くれ／＼  
 もそう云っていたのだよ、決して出ちやアならない、今に私  
 が宜よいようにするから、お前心配おしでないよといって置くのに、

親の言葉に背いて家出をしたものだから、たちま忽ち親の罰ばちがあたつて、あゝいう訳になつたんだから、私はもう皆みんなこれまでの約束ごとと諦めていたが、お前の顔を見たら何うにも我慢が出来なくなつて声を出しましたが、もどくお前の為にか家出をしてこんな死し様ようをしたのだからお前何卒どうぞお線香の一本も上げて回向をしてやつておくれ」

桑「へエ、何とも申そう様はございませぬ、誠に何うも重々わたくし私わたしが悪いのでございます」

内儀「いゝえ、お前ばかりが悪い訳じゃアないよ」

鳶「おゝ番頭様さんちよいと此処こゝへ来ねえ」

番「あい、何じや」

鳶「おゝ糸どんはちゃんど此処にいるよ、え、おう、人を殺して金を取ったような訳なら、プイと何処かへ逃げちまわア、己が寺へ知らせに行くまであつけらけんと居られるか、さ、何うだ、これでもまだ手前は己を疑つてやアがるか」

番「まアあんたは、糸之助を鼻尻にしておるで、そう思いなはるのじゃ、これ糸之助ちよつと此処へ来い、汝はまだ年は十九で、虫も殺さぬような顔附をして居るが太い奴ちや、体よくお嬢様を誘い出して、不忍弁天の池の縁の淋しい処でお嬢様を殺して、金を取つて、死骸を池の中へ投げ込んだに違いあるまい、さ、どうだ、真直に云うてしまえ」

斯う云われるともと人が善いから、余り腹が立つて口が利かれ



ない、いきなり立つて番頭の胸倉へ武者振りつこうとする途端に、ポンと墮おちたのは九兵衛が置忘れて帰った女みようとぎんちやく。夫おとこ、巾きん著ちやく、番頭は早くも之これを拾い取って高く差上げ、

番「こ、是じゃ、お内儀いゑはん、是はお嬢様さんが不斷持つて居やりました巾着でがしよう」

云いながら振ると、中からドサリと落ちた塊かたまりは五十両ではなくて八十両。

### 三

え、引続いてお聴きに入れまする、お梅桑之助は互に若い身そ

らで心得違をいたしたるより、其の身の大難を醸かもしました。扱さて彼  
の梅には四徳を具すというが然そうかも知れませぬ、若木を好まん  
で老木おいきの方を好む、又梅の成熟するを貞ていたり、とか申して女子おなごの  
節操みさおあるを貞女というも同じ意味で、春は花咲き、夏は実を結び、  
秋は木この葉が落ちて枯木のようになつたかと思つと、又自然に芽  
が出て来るは、誠に妙なものでございまして、人も天然自然に此  
の物を見る、あゝ好よい景色だとか、綺麗な色だとか、五色ごしきばかり  
ではなく木きの葉の黄ばんだのも面白く、又染しみだらけになつたのも  
面白い、これは唯其の人の好みによつて色々になるのでございま  
す。「心をぞわりなきものと思ひぬる見る物からや恋しかるべき」  
で見る物も恋しく、心と云うものは別に形は無いが、善を見れば

善に感じ、悪に出逢えば悪に染まる、されば己の好む所の境きようが界いが悪いと其の身を果すはたような事もあるのでございます。

桑之助は奉公中主人の娘お梅に想われたのが、因果の始りはじまでござりまして、自分も済まない事と観念を致したから、兄玄道の側へ参り、小さくなつて、温順おとなしく時節到来を待つて居ました、所へ千駄木の植木屋九兵衛というものが参り、

九「昨晚お嬢様さんがお出いでになりましたから、私わたくしが何処どこへでもお逃し申すようにするゆえ、金子かねの才覚をして来い」

と云うので、態わざとお梅の巾着の中に三両ばかり入れた儘置いて歸つた。是が九兵衛の企たくみのある処でござります。此方こちらはまだ年が若いから、何の気も附かず、是は全くお梅から届けたものと心

得て、前後あとさきの思慮も浅く、其の巾着の内へ、本堂再建さいこんの普請金八十両というものを盗み出して押込み、これを懐へ入れて置いたのが、立上る機勢はずみにドサリと落ちたから番頭はこゝぞと思つて右の巾着を主婦あるじの前へ突付けたり、鳶頭かしらにも見せたりして居丈いたけだ高かになり、

番「さ、糸之助、此の巾着が出る上は貴様がお嬢様さんを殺したに相違あるまい」

と責めつけたから、座中の人々互に顔と顔を見合せ、鳶頭も甲州屋の家内も実に驚いて、「よもや糸之助がお梅を殺して五十両という金子きんすを取りはすまい」とは思うが、金子かねが出た。見ると五十両ではなくして八十両の包み金がね、表書うえには「本堂再建さいこん普請金、

世話人 萬屋源兵衛よろずやげんべえあずか 預る」と書いてあつたから、誰より驚いたの

は玄道和尚で、ぶる／＼震えながら、

玄「ま、これ桑之助、ま、此の金子かねは何うした」

桑「はい／＼申し訳がございませぬ」

玄「これはまア……番頭さん、鳶頭、又御当家の御家内様まで、

桑之助がお嬢様を殺して金子きんすを取つたろうという御疑念をお掛け

なさるは御道理ごもつともの次第でござる、なれども、此の儀に就ついては

私わたくしより少々桑之助へ申聞もうしきけたい事がござれど、少しく他聞ほかかを憚

りまする故、何所どこか離れたお居間はござりますまいか、余り人様

のお出いでのない所を拝借はいせきいたしたいもので」

内儀「はい／＼、あの鳶頭、奥の六畳へ連れて行つたらよかる

う、離れて、彼所あそこが一番静しずかでもあり人が行かないから」

鳶「宜いいかね、大丈夫かえ和尚様さん」

玄「いえ、決して逃しは致いたしませぬから、御安心なすつて……  
さア来い」

と糸之助の手を執とつて引立てる。糸之助は和尚の従者ともで来たのだから今日は\*耳こじりを差して居る、兄玄道に引立てられ、よんどころ扨なく奥の離座敷へ来るといきなり肩を突かれたからパツタリ畳の処へ伏しました。玄道和尚は開き直つて、

\*「みじかいわきざし」

玄「これ糸、手前はまア呆れ返つた奴じゃ、これ手前はな、御両親が相あいはて果てからと云うものは、私わしの手許に置いて丹精をして

やつたのじゃないか……女子おなごの手もない寺へ引取り、十一としの歳から私が丹精をして、読よみ書かきから行儀作法に至るまで一通りは仕込んでやったが、何をいうにも借財だらけの寺へ住職をしたのが過あやまりで、なか／＼然そう何時いつまでも手前一人に貢いでやる訳にも往ゆかぬから、不自由を堪こらえて御当家へ願ねがい、住すまいこませると、長ながの歳とししつき月御丹精を戴いた御主人様の大恩を忘れ、奉公人の身の上でありながら、御主人様の令嬢と不義いたずらをするとは、何と云う心得違ちがひの事じゃ、それで手前は武士の胤たねと云われるか、私も手前も、土井大炊頭どいおおいのかみの家来はやくわさんざえもん早川三左衛門の胤たねじゃないかい、私は子供の時分は清せい之の進しんと云うたが、どの人相見みに観みせても、剣難けんなんの相があると云うたに依よつて九歳おひの折おりに出家を遂とげ、谷中なんせん南泉

寺じの弟子になつて玄道、剃てい髪はつをしてから、もう長い間の事じ  
 や、其の後ご嘉永はじめの始はじに各藩かくばんにて種々さまざまの議論が起り、えろう  
 やかましい世の中になつた、其の折父早川三左衛門殿には正義を  
 主張して、それはいかぬ、然そういう道理は無いと云うて殿へ御ご  
 諫言げんを申上げたる処、重役の為に憎まれて遂には追放仰付けら  
 れた、お父様にはそれを口惜くやしゆう思おぼしめし、邸やしきを出てから  
 切腹をして相果あいはてられた、続いて母様もお逝去かくれになる時の御遺言  
 に、お前の弟桑之助はまだ頑がん是ぜもない小兒しょうに、外ほかに頼る者もない  
 に依つて何卒どうかお前、丹精をして成人させて呉れとのお頼み、そこ  
 で私が寺へ引取つて、十一から三ヶ年も貴様の面倒を見てやつた  
 が、今もいう通り何分ふに不如意よじやに依つて御当家へ願うたのも、



然ういう柔弱な身体じゃから、商人あきんどに仕ようと思うた私の心こころ づくし  
 尽も水の泡となり、それのみならず誠に愧入はじいったのは此の八十  
 両の金子かねじゃ、知つての通りの貧乏寺じゃが幸いにも檀家だんけの者に  
 も用いられ、本堂が大破に及んだ、再建さいこんをせにやなるまい、私わし  
 が世話人に成つてやる奮発せいと、萬屋も心配をして呉れて、こ  
 れ見ろ、まア是だけの金子を集めて、是を資本もとでに追々おいくと再建に  
 取掛るつもりでわざ／＼源兵衛さんが一昨日おとつ持つて来たに依つて、  
 直手前すぐに仕舞つて置けと云うて渡した其の金子を手前ぬすみだが盗出し  
 て此所こゝへ持つて来るとは何ういう了簡じゃ、此金これがなければ片時  
 も己はあの寺に居おられぬという事も、手前よ能う知つて居おるじやな  
 いか、憎い奴じゃ、同じ早川の家いへに生れても、私は総領の身の上

でありながら出家となり、又手前の兄三次郎さんじろうと云う者は、何う  
 いう因縁か、十一二歳の頃からして盗心とうしんがあつて、一寸重役ちよつと  
 の家へ遊びに行つても、銀の煙管じやとか、紙入じやとか、風呂  
 敷とか、手拭とか云うものを盗んで袂へ入れて来るじや、そこで  
 お父様とうさまも呆れてしまい、此奴こやつが跡目相続をすべき奴じやけれど  
 も仕方がないと云うて、十九の時に勘当をされた、丁度三人の同き  
ようだい胞ほうでありながら、私は出家になり、弟は泥坊根性があり、手  
 前は又主家しゆうかの娘と不義をして暇いとまを出されるのみならず、兄の身  
 に取つては大切の金子かねまで取るという奴じやから、何う人さんか  
 ら云われても一言の申訳はあるまい、憎い奴じや、兄の自滅をす  
 るという事を悉くわしく知つて居ながら、斯こういう不都合をするとは

云おう様ない人非人め」

と腹立紛れに糸之助の領上えりがみを取つて引倒して実の弟を思うあまりの強意見こわいけん、涙道るいどうに泪なみだを浮べ、身を震わせながら糸之助を畳へこすり附ける。糸之助は身の言分いいわけが立ちませぬから、

糸「申訳を致します……もも申訳を……何卒どうぞお放しなすつて下さいまし」

玄「さ、何う言分をする」

糸「へい申訳は此の通りでござります」

と自分の差して来た小短い脇差を取つて抜くより早く喉のどへ突立てにかゝつた。玄道は胆きもを潰して其の手を抑おさえ、

玄「こ、これ待てッ」

糸「いゝえ、お留め下さるな、申訳が有りませぬから、私わたくしは自害をいたして申訳をいたします」

玄「自害をしたってそれで済むと思うか」

頻しきりに争うておる処へ、ガラリと縁側の障子を開けて這入つて来た男を見ると、紋羽もんばの綿頭巾を鼻はなつかむり被かにして、結城ゆうぎの藍あい微塵みじんに単衣ひとえものを重ねて着まして、盲縞こしらえの腹掛という扮装なり、小意気な装なりでずつと這入つて、

男「ま、ま、お待ちなせえ、おう詰らねえ事をするない、手前てめえは死なねえでも宜いいや」

糸「へエー」

と顔を見ると今日朝うちの中うちに来た、千駄木の植木屋の九兵衛だか

ら悔<sup>びつく</sup>りして、

彙「おや、貴方は千駄木の植木屋さんで……」

九「ウム、植木屋の九兵衛だ、お前はまア死なねえでも宜<sup>い</sup>い……え、和尚<sup>わっち</sup>さん私は、千駄木の植木屋の九兵衛と云つて、此の彙之助<sup>だまか</sup>を騙しに行つた悪党でござえます」

玄「何じゃ……悪党とは」

九「へエ誠に面目次第もござえませぬ、お前<sup>めえ</sup>さんの為には現在の弟でありながら、十九の時に邸<sup>やしき</sup>を出て了<sup>しま</sup>いやした、それゆえ彙の顔<sup>あに</sup>を知らねえもんだから騙<sup>だまか</sup>しに行つたんです、兄<sup>あに</sup>さん大層まア年が寄つて、お顔を見忘れちましたよ」

玄「なに誰<sup>だれ</sup>じゃ」

九「誰でもねえ、お前まえさんの弟の三次郎です」

玄「おゝ、弟の三次郎、成程そ然う云えば、何所どこか見覚えのある顔だ、それが何うして此所こゝへ出て来た」

九「まア聞いてくだせえ、私わっちが上野の三橋側の夜明よあかしの茶飯屋のところ、立派な身形みなりの新造しんぞが谷中長安寺への道を聞いてるん

で、てつきり駈落にらものと睨にらんで横合から飛び出し、私もね、お前

さんが其の長安寺の和尚さんとも知らず、桑之助が私の弟という

ことも知らねえもんだから、旨い金蔓かねづるに有附いたと実ア其の娘だまかを駈ひつぱりだして引張出し、穴の稲荷の脇で娘を殺し、巾着ぐるみ有金

を引ひつさら浚い、死骸は弁天の池ほうン中へ投り込んだのは私の仕業だ、

そればかりでなく、娘を殺す前まえに、段々様子を聞くと、宅うちに奉公

をして居た桑之助と云う者は、いとま暇が出て当時では谷中仲門前の長安寺と云う寺に居るんだと聞いたから、もう一仕事しようと思つて桑の処へ出かけ、旨く騙だまかして金子かねを持って逃げておいでなさいと云つたのは、私の入智慧いれぢえ、本堂再建の普請金八十両を盗ませたのも皆この三次郎の作略でござえます」

玄「ふむー、此奴こやつ……えらい奴じゃな」

三「でね、まア然そういう理由わけなんだから、鳶頭と番頭や何か残らず此所こゝへ呼んでおくんなせえ」

玄「桑、早う呼んで来い」

桑「誰方どなたも早く来て下さいましよ」

と呶鳴つたから、何事かと思つて鳶頭も番頭も皆揃つて来まし

た、ずらりと大勢ならべて置いて、右の一伍一什いちぶしじゅうを三次郎が話した時には、鳶頭も番頭も驚いて暫しばらくは口も利けぬくらいでありました。

三「さ、何うぞ私わつしに繩を掛けて引く処へ引いてお呉んなせえ、決して糸之助の科とがじやアねえ、私わつちが人殺ひとごろしをしたんですから：  
 ；其の代りどうか兄あにさん糸を可愛がつてやつてお呉んなさい、又糸も宜いいか、もう四十を越してゐる兄さんだ、能よく大事にして上げてくれ、よ、お前いくつ幾歳になる、なに十九歳だ、うむ然そうか、いや鳶頭、誠に何とも云いようがごぜえませぬ、お前めえさんは糸を鼻屑にしてお呉んなすつて、やれこれ云つて下すつたのは、私わつちからも厚くお礼を申します、実ア今日此処こゝへ忍び込んで間まが好よかったら、



此のどさくさ紛れに、もう一仕事する積で来た処が、まア斯ういう訳になりましたから何卒私へ繩を掛けて突出してお呉んなせえ……やい番頭、さ、己を縛れ」

番「なに此奴……汝が泥坊か、此のお庭へ何所から這入った」

三「何所からだつて這入るが、さ縛れ、其の代り己が喰い込めば、もう娑婆ア見る事ア出来ねえから、此の番頭手前も一緒に抱いて行くから然う思え」

番「そりやアえらい事ぢやな」

是れから捨て置けませぬから、甲州屋の家内は家から繩付を出すのも厭だと心配をして果しが無い。そこで三次郎が到頭自訴いたして、何うしても斬首の刑に行わるべきであつたのが、何

ういう事か三宅へ遠島を仰付おおせつけられましたが、大層改かいしゆん 俊ゆんの効あちが顕あちわれ、後のちお赦しやになつて、此の三次郎は兄玄道の徒弟となり、しゆうぎよう

修なづりさんじ 行なづりさんじの功を積んで長安寺の後ごじゆう住ごじゆうを勤めました。此の者は穴あ釣なづりさんじ三次と云つて、其の頃下谷では名高い泥坊でござりました。

又桑之助は遂に甲州屋へ貰われまして、甲州屋の跡目を相続いたし、其の後のち浅草仲町の富田屋という古着商ふるぎやから嫁を貰いましたが、此の嫁も誠に心懸けの良い婦人でござりまして、母に孝行を尽したという末お目出度いお話でござります。





## 青空文庫情報

底本：「定本 圓朝全集 卷の一」近代文芸・資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年6月10日発行

底本の親本：「圓朝全集卷の一」春陽堂

1926（大正15）年9月3日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号はそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」は、それぞれ「其の」と「此の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「巾著」と「巾着」の混在は、底本通りです。

※「\*」は注釈記号です。その内容は底本では上部欄外に書かれています。

※表題は底本では、「闇夜《やみよ》の梅《うめ》」となっています。

入力：小林 繁雄

校正：かとうかおり

2000年5月10日公開

2016年4月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 闇夜の梅

三遊亭圓朝

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>